慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	李光洙の『一説春香傳』の特性の研究
Sub Title	A study on the trait of the Yi Kwang-soo's 'Ilsul Choomhyang jun'
Author	崔, 在佑(Choi, Jae Woo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2004
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション No.33 (2004.) ,p.51- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20040002-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

李光洙の『一説春香傳』の特性の研究

崔　在　佑

1. 問題提起

‘春香傳’[1)]は，言うまでもなく韓国古典作品の中の古典である。古典であることのみならず，長い間多様な異本で再生産されている代表的な作品でもある。その結果 80 余種の小説を筆頭にパンソリの辞説，唱劇本，シナリオ，マダンノリの台本，戯曲，詩，ミュージカルの台本，オペラの歌詞，漫画等 120 余りの篇を上回る多様なジャンルを成した。長い間多様なジャンルでの再生産が可能だった理由は，その基層に韓民族の正体性の土台になる‘檀君神話’の原型性が置かれているからであろう[2)]。

韓国の文学史にとって，20 世紀の初めは歴史的絶地点であるとまで評価される程，古典と近代の偏差が激しく揺動していた時期であった。このような時期に，韓国の近代文学の先頭に立っていた春園李光洙により，‘春香傳’が 20 世紀的様相で再生産されたが，それがほかでもない『一説春香傳』である[3)]。この作品は，言うまでもなく古典の‘春香傳’をパロディー化[4)]した作品である。

文学の作品が時代の流れの中で創作されるというのは付言を要しない。特定な目的をもって前時代の作品をそのまま転写する場合は全く別個の問題であるが，すでに存在する以前の時期の作品を母本でする場合も，新たに改作される時代の特性が一定に表れて当然

1）‘春香傳’はある特定作品を指称するのではなく，異本群の総称だと言える。特定作品を指称する場合は『春香傳』で表示する。

2）薛盛景，『春香傳の通時的研究』，瑞光学術資料社，1994。

3）『李光洙全集』に記載の題目をそのまま使う。東亜日報に連載されている当時の題目は‘春香’であるが，連載当時の題目よりは単行本で出す際に付けた‘一説春香傳’がより普遍的に使われているからである。

4）パロディーとは作家が特定な意図を持って前時代の作品を借用する場合を指称するが，本稿では広い意味で使われるパロディー，即ちすでに存在している作品を借用して改作する行為全般を指称する概念で使おうと思う。

だ。それは広い視野からみると，時代の特性であるが，時代の制約を受けた作家の特性であるとも理解できる。

春園は『一説春香傳』の以前にも古典の作品をパロディー化した作品を何篇か残しているが，当然のことながら，それらには春園の特徴的面貌が良く表れている[5)]。『一説春香傳』は春園の多くの作品がそうであるように，新聞の連載小説[6)]であり，自らの意図によって題目を若干変えたが[7)]，我々に馴染みのストーリーにほぼそのまま従っている。春園のまた別の作品である「嘉実」や『許生傳』等も既存の作品の流れから大きく外れていないのは同様である[8)]。無論『一説春香傳』は，春園の意図以外に‘東亜日報社’の要求に応じた面もあるので，その他の作品とは違う部分があると言える。東亜日報に載っている‘小説予告’を見ると，‘春香傳’と‘沈清傳’を‘国民文学’の代表と挙げながら，その時まで残っている作品が“歌う役者によって歌詞が違い，甚だしくは人物の性格さえ違い，そのうえ当時の低俗な流行に合わせるために野卑な才談や肉談稗説を多く混ぜて，金より砂が多くなるようになった。”と言いながら，賞金‘一千圓’をかけて作品を募集したが，適当な作品を得ることができなかったから，春園に依頼したと書かれている。それゆえ『一説春香傳』が完全に春園の創作の意図によって作られた作品と見るには困難な側面がある。しかし，淫談でも卑俗的な内容が少なくなったと言う点以外には，東亜日報社の介入を確認するのは難しい[9)]。東亜日報社の頼みを受けた春園は当時流行していた，多くの‘春香傳’の異本を読んだようである。作品の末尾に直接摘示している“この時から八道のクァンデ（パンソリ役者）達が春香の貞節を歌に作って，数百年来歌ってきたが，後世に春香の同胞の中に春園と言う者がこの歌を集めて万古烈女春香の事跡を書いたのがこの本である”[10)]という言及が一次的な証拠資料だと言えるであろう[11)]。

5） 筆者は春園の『許生傳』を通じて春園の特性を具体的に調べて見たことがある。崔在佑，「李光洙の『許生傳』の形象化特性について」，『韓国の近代文学と日本』，召明出版，2003。

6） 1925年9月28日『再生』が218回の長編で終わった後，1925年9月30日から1926年1月3日まで一日も休みなく96回が東亜日報に連載された。

7） 東亜日報に連載された小題目は次の通り。‘縁分1－13/初夜1/サラン2－16/離別1－9/想思1－5/守節1－21/御史1－22/出頭1－10’。

8） 春園がパロディーと言う技法を使う場合，既存作品の大きい流れから外れない範囲内で細部内容の変化を通し作品の味を変える方であると言える。

9） その当時の春園の作家的な位置から見れば，東亜日報社が多くの部分に介入したとは考えにくい。淫談でも卑俗的な内容と関連される大きい枠を提示する水準で注文を終えたと見るのが無難であろう。

『一説春香傳』には，‘集めた’と言った作家の言及に劣らない程の多様な話素が総合的に現れている。従ってどんな部分が既存のどの異本から来たかを探るのは，この作品の性格を表すための最低限の作業になるだろう。春園ほどの作家が，‘集めた’と言及していたとして，かけはぎ水準の作品を作ったとは考え難い。当然春園が独特に創造した話素も入ってあり，同じ筋や話素と言っても，春園的に変更された部分もある。そこには，春園に内面化されていた近代的技法が底辺に置かれている。本稿では『一説春香傳』が持っている異本の性格と形象化の特性に注目する。

2. 異本的性格の探索

一つの作品が，すでに存在している作品或いは作品群の影響の中で作られたなら，その影響の授受関係を調べる作業は，再生産された作品の性格を把握するにおいて非常に緊要である。母本或いは母本群の性格により，後代本の性格も相当の部分決定される可能性が高いからである。だが，作品の影響関係を調べる作業は思ったより簡単な問題ではない。ある一つの作品から直接影響を受けて作られた物ならば，一対一の比較を通じて多様な結果を出せるが，特定な作品ではなく，種種の異本との相関関係を考慮しなければならない場合には簡単ではない作業になる。代表話素[12]に見える影響関係と具体話素が持っている影響関係が各々異なる場合を考えられ，代表話素と具体話素が同じ異本の影響を受けたとしても，前半或いは後半のように，部分によって各々違う異本の影響を想定できるからである。

このような難点を避けるため，‘一つの仮説’を立て，『一説春香傳』と相関関係にある異本を糾明するための手立てとしようと思う。この仮説と言うのは，春園が見た可能性のある異本を，時代の流れの中で想定し，その異本を中心に『一説春香傳』を対比することによって，もっと効率的に異本的性格を明らかにしようとするものである。異本の性格を調べるためには，できる限り多くの異本を対照するのが一番大切なことであるのは，今更

10）『李光洙全集』3，三中堂，1962.6，369 頁。以後の引用はこの本を用いる。

11） 無論作家の言及を額面通りに信頼するのは難しい。しかし，後の詳論を通じて『一説春香傳』が様々な異本と密接な関係に置かれている点が具体的に証明されるはずである。

12） 異本の系列を規定するくらいに作品の核心骨格を成す話素を‘代表話素’と言い，核心的な機能ではないが作品に味を加えてくれる話素を‘具体話素’と呼ぶ。既往の‘結合モチーフ’と‘自由モチーフ’の関係と類似すると理解できる。

繰り返して考える必要もないことであるが，数多い異本がある‘春香傳’だから，あまりにも放漫な作業の中で対照作業が効果的ではない憂慮が少なくない。

このような渦中に春園が言及した，“春園と言う者がこの歌を集めて作ったのがこの本”であると言った部分は，仮説を立てて作業を進行する可能性を与えてくれる。春園がすべての異本を見たはずはなく，その状況を考慮して条件を充足させる異本を探すなら，効率的でありながらも満足な結果を得られるであろう。

従って，本稿では春園が言及した，その‘歌’が何かと言う点を先に考慮しようと思う。恣意的に母本を制限して，取り落とす部分が生じることもあるし，実際にそんな部分があったら深刻な欠陥になりうるにも関わらず，このような仮説を立てて作業をするのは，その当時の春園の状況を考慮すれば十分にそのような可能性があるという点と，より効果的論議を可能にするためである。

まず考えなければならない事は，1920 年代に存在していながら，春園が直接読める可能性が高かった作品は何かという点である。春園と同時代に刊行され多くの人気を得た作品であればあるほど，また春園と密接な関係にあった人の作品であればあるほど，春園が読んだという可能性はもっと高くなるであろう。この二つの条件を考慮すると，まず『獄中花』と『古本春香傳』が思い浮かぶ[13)]。

『獄中花』は 1912 年に普及書館から活字本で出版され，『古本春香傳』は六堂の作品として 1913 年に刊行された。『獄中花』は出版された後，その余勢を駆って，多くの出版社から類似作品が溢れ出たほど[14)]，当時の影響力を認められ，『古本春香傳』の作家である六堂は，春園とは切っても切れない人物であるため，この異本を春園が見た可能性は他の異本より遥に高いと言える。六堂と春園は韓国文学史上，‘二人文壇時代’と言う一時代を風味した主役であり，六堂が主宰した『少年』のような雑誌を通じて緊密な協力関係を維持した仲である。勿論その後，二人の間には愛国者と変節者と言う大きな違いが生じるが一旦影響関係と言う面で局限させて見れば，別に説明不要な程度と言えるであろう。

13）『獄中花』は‘朴基洪唱本春香歌’，申在孝の『男唱春香傳』，‘張子伯唱本春香歌’等の影響の中に，『古本春香傳』は『南原古事』の影響の中にある異本である。特に『古本春香傳』は同じ系列本である‘京板 35 張本春香傳’と類似した構成をしている。従って母本や系列本との検討が必要である。しかし本稿では母本と認定されている代表本や類似本の検討に留める。より具体的な検討作業は次の機会に延ばす。『獄中花』の母本に関する研究は次の論文参照。金鍾徹,「＜獄中花＞の研究（1）――李海朝改作に対する再論――」,『冠岳語文研究』20, ソウル大学国文科, 1995。金賢陽,「＜獄中花＞の系譜」,『東方古典文学研究』1，東方古典文学会，1999。

『一説春香傳』に見える時調は，二人の関係を象徴的に見せてくれるよい例だと言える。‘時調復興運動’の最中だった1920年代，二人の位相は大きな違いを見せていたが‘時調復興運動’の旗幟になった‘国民文学運動’の主要な役割を担当していた点では，依然二人の間の影響関係を確認できる。『一説春香傳』に見える時調はそのような関心が小説作品に直接現れたものだと言える。

1）話素段落

ここでは『一説春香傳』の性格を異本との対比を通じて確認しようと思う。その為とりあえず話素段落を分け，代表話素と具体話素に分けて言及しながら，『獄中花』と『古本春香傳』を中心に，既存異本との影響関係を調べて見ようと思う。それ以外の異本は，母本の性格を持つ作品や，重要性が認められる異本に限定して検討する。

『一説春香傳』を話素段落で分けて見ると次の通りである[15]。

＜縁分(縁）＞

(1）李道令と房子の対話――景色見物の案内の要求

(2）広寒楼へのお出まし――お出ましの準備，李道令の装いの姿，お出ましの路程

(3）春香との出会い――広寒楼到着（房子の広寒楼境概の説明，酒席），春香の発見（李道令と房子の春香の確認対話），春香の招待（房子の拒絶と李道令の催促），房子の伝言（春香との対話：落床モチーフ）

(4）春香の反応――拒絶の後の帰宅，房子の報告（春香の反応の伝達），房子が春香の家を訪問（李道令の手紙の伝達，春香との言い合い），月梅の仲裁（月梅の胎夢の説明:

14）『獄中花』は1912年に普及書館から活字本で出版された後，1913年に『鮮漢文春香傳』，『増修春香傳』が出刊され，相次いで1914年に『増像演芸獄中佳人』，『演訂獄中花』，1915年に『特正新刊獄中佳花』，1917年に『諺文春香傳』，『萬古烈女日鮮文春香傳』，1918年に『獄中佳花』，1920年に『獄中花春香傳』，1921年に『諺文春香傳』，1922年に『古代小説獄中佳人』，1925年に『萬古烈女獄中花』，『萬古烈女春香傳』，『絶代佳人成春香傳』，『絶代佳人』，1932年に『萬古烈女図上獄中花』，1935年に『萬古烈女特別無双春香傳』，『獄中佳人』，1942年に『国語対訳恋情春香傳』等が出た。

15）＜ ＞の形式的な段落の区分は『李光洙全集』を従う。(新聞連載当時の段落は脚注7番参照)（ ）の中の番号はより大きい流れの中で『一説春香傳』を読みとることが出来ると思われる地点を分けて見たものであり，‘――’の後に付いている内容は，より具体的な話素を見せるものである。

李花・桃花の話)，春香の返事

(5) 房子の報告――李道令と下人との対話（房子の様子の確認)，房子の報告（春香の手紙の伝達)

(6) 李道令の帰宅

＜サラン(愛)＞

(7) 李道令の書斎での様子――李府使と郎庁との対話（李道令に蝋燭二本をやる)

(8) 春香の家の訪問――路程（李道令と房子との対話)，春香の家に到着（房子と月梅との対話)，李道令と春香との対話（誕生日の確認)

(9) 愛の場面――月梅に春香との求婚，月梅の約定書の要求，愛し合う様子（春香の勧酒歌，李道令の勧酒歌，春香と李道令との服を脱がせる対話)

(10)続けられる二人の戯れ――李道令の帰宅と訪問の反復（春香の部屋での本読み――李府使の試験に備え，春香のコムンゴの演奏――本暗唱，演奏に合わせての李道令の千字解き，サラン遊び――万古英雄・豪傑・忠臣・節士のプリ（解き)，なぞなぞ遊び，踊り，サラン歌)

＜離別＞

(11)時間の経過――一年後の李府使の内職発令

(12)春香との離別――春香の家の訪問（春香・月梅との対話：恨歎と慰労)，信物の交換，髪結い，春香の悲しい姿（器物の散乱)，離別酒の飲酒

(13)李道令の上京――李道令の帰宅後の上京の準備，五柳亭での離別，房子の大夫人の催促通告，李道令の去る姿

(14)春香と月梅との対話――李道令を巡った葛藤

＜相思＞

(15)春香の相思の日々――李道令の手紙の到着，月梅の不平と春香の返事

(16)春香に対する世間の行為――春香を見下げる人々の行態

(17)春香の嘆息

＜守節＞

(18)卞府使の到任の紹介――一年間の中間府使の移配後，新延官属の現身と卞府使の催促

（房子と春香探しの問答），到任の路程（行次の姿と路程記），到任（官属の現身，春香に関する問答），妓生点呼

(19)春香待令分付――使令の派遣，春香の歓待（酒と金の提供），他の使令派遣，春香の待令

(20)守聴の分付と拒絶――杖刑の命令（十丈歌），春香下獄（月梅の痛哭）

(21)たらず者達の姿――たらず達の春香救援（覆う物，薬，重湯提供），牢獄の前でのたらず達の行為（酒宴，投銭，喧嘩等）

(22)春香の姿――春香の恨歎と月梅の牢獄での世話，春香の夢（黄陵墓の訪問），春香の手紙発送

＜御史＞

(23)李夢龍の状況叙述

(24)科挙の及第――謁聖試の壮元，全羅道御史特差

(25)御史發行――御史の装いの描写，路程記，農夫達との対話１（府使の政治の探聞，子供たちの戯弄），寺での止宿（少年士達との賭作詩），偽物の春香の墓の前での痛哭（姜座首の娘の初墳前），萬福寺に到着（月梅の佛供の場面，老僧の佛供：李道令の及第の発願），房子との出会い（春香の手紙受けとり），農夫達の姿２（牛に対する言語遊戯，府使の探聞），路中の酒屋での酬酢（人々の不満：府使の収奪，妻以外の女性との浮気，春香の話，李道令の陰口）

(26)南原入城――景色の感懐，春香の家に到着（家の描写，月梅の祈願の声聞き）

(27)御史と月梅との出会い――月梅の嘆き，上丹の晩御飯の接待，御史と月梅との対話（李道令の宿泊願いと月梅の拒絶）

(28)春香の獄中の夢と夢合わせ――金パンス（盲目の易者）の淫乱に対する懲戒話素包含

(29)李御史の牢獄訪問――李御史と春香との再会，春香の頼み（月梅と御史に自分の願いを伝達），御史の春香慰労，一行帰宅，御史が春香に命の保存を頼み，御史と月梅との宿泊対話

(30)客舎の描写――客舎の乞食達の姿

＜御史出頭＞

(31)南原邑内の簡略叙述

(32)誕生日の宴会の様子

(33)御史の入場――正門からの入場失敗の後裏門から入場，雲峯営将の知人知感
(34)誕生日の宴会での御史の行為――上座取り，お膳の要求，お膳の倒し，勧酒歌の要求，酒と飲食を食べる様子，年の幼い妓生にタバコ要求，屁（へ），本官の致富等
(35)金樽美酒詩――御史の自願作詩
(36)暗行御史の出頭――出頭後の宴会の様子，卞府使の封庫罷職，公事処決
(37)春香との再会――春香待令，春香の気絶，妓生達が春香の頸枷を外し，春香の介抱，李道令の虚偽の守聴命令と春香の拒絶，春香に玉の指輪を渡す（筆頭妓生を通じ）
(38)月梅の動静――家で嘆き，喜ぶ姿
(39)春香の帰宅
(40)道令の姿――未決公事の処理，春香宅訪問，春香の慰労
(41)春香の上京――月梅と一緒に上京
(42)李御史上京後の行為――王に復命，春香の貞節を奏達，貞烈婦人の職牒下賜，両親に告げ妻として迎える
(43)後日談――六卿相公まで到達，三兄弟の出産，内外孫の繁盛
(44)創作談

話素段落をみると，まず『一説春香傳』の独特な面が何ヶ所か現われる。何よりも最初と最後の部分が目につく。大体‘南原古事系’が李道令の紹介から始め，‘完板系’は春香と関連のある部分が冒頭に配置されているのを見れば，古典小説だけでなく20年代の小説にも余り見られない，発話で始まる冒頭は躊躇なく『一説春香傳』の作品の特性と指摘できるのではないだろうか。また最後にある創作談は，『一説春香傳』の特性を見せる部分と言うよりも春園の特性だと言うのがより適切であるが，ここではとりあえず作品の構成上，独特だと言う点を認定できることだけを確認しようと思う。春園の独特な話素の配置は，以外にも所々で確認できるが，作品の流れを新たにするのではない以上，異本的性格を調べる場ではそれほど重要ではないと思われる。

2)『一説春香傳』の異本的性格

これから話素段落を通じて『一説春香傳』の異本的性格を把握する作業が試図される予定だが，この作業は大きく二つの基準下で進行される。一つは，‘春香傳’の一般的なイメージを考慮しながら代表的な話素を確認することであり，もう一つは具体的な話素の影響関係を確認することである。

我々は‘春香傳’といえば，基本的に思い浮かぶ場面がある。それは永遠な古典と認識されている‘春香傳’が，本のみならず様々な経路を通じて我々の心の中に認識されてしまった総合的なイメージである。

＊広寒楼の場面：李道令のお出まし，春香のブランコ乗り，李道令の春香招待
＊李道令と春香との愛の場面
＊離別の場面
＊春香と卞府使との対立の場面：守聴拒絶と杖刑の場面
＊暗行御史の出頭の場面
＊再会の場面：李道令の虚偽の守聴強要と春香の拒絶
＊大詰め：報償と後日談

まず，春香と李道令を中心に上の幾つかの場面が容易に思い浮かぶ。無論，場面によっては卞府使や月梅，或いは房子や上丹（香丹）のような存在も一緒に浮かぶはずである。思い浮かぶ具体的な内容や場面は，人によって少しずつ違うだろうが，主人公の春香と李道令を中心に，助演の役割をする人物を思い浮かべながら‘春香傳’の印象を描く点，大略的に描いたストーリーラインの輪郭もほとんど似ている点で同一なイメージ化が可能である。

‘代表話素’と‘具体話素’を中心に細部的な部分まで言及しながら論議を具体化させてみよう。まず，＜縁分(縁)＞の部分の代表話素は，‘広寒楼場面’と‘春香の反応’ぐらいになるだろう。‘広寒楼場面’は（1)―(3）までだと言える。もっと拡張すれば，広寒楼で二人が出会い春香の家で再会する場面までの＜縁分(縁)＞の部分全部を含めることもあるだろう。(1）は李道令の居所での場面であるが，広寒楼に行くための予備的性格が強いため同じ部分にまとめられる。

広寒楼の場面は‘春香傳’のすべての異本にあり，その内容は系列によって少しずつ違うが，系列を分ける代表的なのが李道令の招待に対する‘春香の反応’である。『一説春香傳』では春香が李道令の招待を拒絶してそのまま家に帰ることになっている。このような春香の行動は‘代婢呈贖’した身分が後押ししている。春香はもう妓生の身分ではないのである。‘代婢呈贖’の話素は他の系列の異本にも見えるが[16]，広寒楼での出会いの場面で房子の発話により提示される異本は『獄中花』と『男唱春香歌』[17]ぐらいである。『獄中花』の広寒楼の場面が『男唱春香歌』の影響の中にある点が認定されるが，同一のでは

ない。『獄中花』では春香が李道令の招待を漢詩の文句を通じて拒絶してそのまま家に帰るが，『男唱春香歌』では上丹を広寒楼にこっそり行かせて李道令の姿を確認する内容が入っている。また，『一説春香傳』に見える，広寒楼での‘お年問答’話素と房子が春香を招待する為行った場面で見える‘落床’モチーフは『獄中花』だけにあって『男唱春香歌』では確認できない。

春香が帰宅した後の様子も『一説春香傳』の異本の性格を確認させてくれる重要な部分である。話素段落（4）―（6）の部分であるが，春香が帰宅した後，李道令が房子を催促して自分の手紙を春香の家に届けさせる場面である。この部分で重要な話素は‘李道令の手紙’と‘月梅の胎夢’である。手紙は『84張本烈女春香守節歌』[18]と『男唱春香歌』に見られる。『一説春香傳』には李道令の手紙を見た春香が月梅の顔色を探りながら返事を書くので終わるが，‘84張本’では房子について春香が再度広寒楼まで行くという設定が違い，『男唱春香歌』では家に帰る前に広寒楼で返事を送るというのが相違する。月梅の胎夢は『男唱春香歌』，『獄中花』，‘84張本’にあまねく見られるが，‘李花?桃花’話素の胎夢は『男唱春香歌』と『獄中花』だけに入っている。従って＜縁分(縁)＞の部分は『獄中花』と『男唱春香歌』の影響が考えられるが，代表話素と具体話素を同時に考慮してみれば，『獄中花』の影響が認められる。

二番目の段落である＜サラン(愛)＞部分の代表的な話素としては‘不忘記’を挙げられる。‘不忘記’話素は春香の身分と関連づけ論議されながら，‘春香傳’の異本群を分ける基準としても使われてきたが，実際はこの‘不忘記’話素は‘春香傳’の異本群を分けるにおいてそれほど明快な解答とはならないようである。月梅の胎夢や李道令と春香の天上因縁を見せてくれる月梅の夢話素を通じて春香の身分を確定できる‘84張本’は‘不忘記’話素がなくても当然だといえるが，‘代婢呈贖’を通じて庶民と確定されている『獄中花』や『男唱春香歌』にも‘不忘記’話素が現われているためである。勿論後で‘代婢呈贖’をするが，春香の身分を妓生と確定している‘南原古事系’[19]では広寒楼で李道令の招待

16）‘南原古事系列’に見られる。しかし春香が初めから‘代婢呈贖’して素人女の身分で設定されるのではなく，李道令と離別した後家に帰って‘代婢定属’することになっている。‘南原古事系列’のこのような設定は，初めから‘代婢呈贖’したことになっている異本とは，その認識が根本的に違うように見える。後者が庶民と両班との対立軸を想定したのであれば，前者は李道令と卞府使との対立軸を想定したのだと理解できるためである。

17）『男唱春香歌』は『獄中花』との影響関係が認定されているから，必要な部分は検討対象にした。『男唱春香歌』のテキストは，金鎮英外，『春香傳全集』1，博而精，1997.1。

18） 金鎮英外，『春香傳全集』4，博而精，1997. 9。以後は‘84張本’と略称する。

に応じた春香が直接‘不忘記’を要求し，『獄中花』や『男唱春香歌』では李道令が春香の家を訪問した時，月梅によって要求されると言う点が違うといえば違う。

異本群の流れを確認できる，もう一つの話素を挙げることが出来るが，それは‘春香の家訪問’の部分で，李道令が帰宅した後春香の家を訪ねる時期である。『一説春香傳』では帰宅した当日に訪問するが，これは‘84張本’や『獄中花』の影響が考えられる。‘南原古事系’では李道令が帰宅した後一日が過ぎてから春香の家を訪ねることになっている。『男唱春香歌』も当日に訪問することになっているが，書斎での李道令の様子が作家の叙述で非常に短く処理されているため，無視しても良いであろう。李道令が帰宅した後，自分の書斎で春香を思いながらの行動は多くの異本に様々なエピソードで長く敷衍されているためである。

この段落での具体話素を確認して見ると，色々な異本の内容があまねく混さり合っていると思われるが，『獄中花』と『古本春香傳』の影響がもう少し強く感じられ，‘84張本’の影響も見られる。また，他の代表異本には見られない話素の様子も確認できる。春香の家で春香が，‘勧酒歌’を歌う部分や，李道令と春香が戯れ合う部分での‘なぞなぞ’話素ようなものは，‘南原古事系’特に『古本春香傳』の影響が認められる。話素段落（10）の部分にある，李道令が李府使から蝋燭二本を受ける話素は『獄中花』だけにあるので，直接参照して引き入れた部分だと言える。戯れ合う部分は‘84張本’の感じも完全に排除するのは難しい。また，李府使の試験に備えて，李道令が本を暗記するのは春園によって作られた新話素だと言える。

以上のことを合わせて見れば，＜縁分(縁)＞と＜サラン(愛)＞の部分は『獄中花』を主に参照しながら，他の異本を添加し，春園だけの新話素を重ねて付ける方式で成し遂げられたと言っても無難であろう。

三番目の＜離別＞の段落は‘信物の交換’と‘離別の様子’等を代表話素として挙げられる。信物の交換話素は，ほぼすべての異本で確認できる。信物は春香と李道令の双方交換であるにはあるが，場所と時期によって区分が可能である。まず，『一説春香傳』は李府使の内職勝品を聞いた李道令が春香の家に行き春香を慰労しながらお互いに‘樺榴集紗綾鏡’と‘玉の指環’を交換することになっている。この二つの要素を考慮すると『古本

19） 次の『南原古事』テキストを検討対象とした。金東旭外,『春香傳比較研究』, 三英社, 1983. 2。『南原古事』と言う際は前のテキストを論じるときで,‘南原古事系’と言う際は『南原古事』,『京阪35張本春香傳』,『古本春香傳』等を全て称する場合である。

春香傳』が一番近接している。場所と時期が一致しているだけでなく，名前も‘樺榴集紗帽鏡’と‘玉の指環’で類似しているからである。『南原古事』も場所と時期は類似しているが，信物の名前が‘石鏡’と‘玉の指環’で少し違う。『獄中花』は春香の家という場所は一致するが，五里亭へ行く道に春香の家に立ち寄って交換する点が異なり，『男唱春香傳』は五里亭で交換する事になっているので相異する。

離別の様子は，異本毎に少しずつ異なる形象となっている。離別する場所の名前と離別を催促する人物によって影響関係を若干確認できるくらいである。『一説春香傳』は‘五柳亭’で最後の離別をしている途中に房子が大夫人の催促を通告することになっているが，『獄中花』は五里亭へ行く道の春香の家での離別が遅くなるや，房子が催促するという点が類似しており，また，『古本春香傳』を含む‘南原古事系’は馬丁が催促することになっている。しかし五里亭で離別するという設定の類似性が認められる。春園は距離感が強い‘五里亭’を，雰囲気が感じられる‘五柳亭’に替えただけである。『南原古事』には‘十里亭’となっており，‘84 張本’では春香の家で離別する。

具体話素は『古本春香傳』の感じが少し強い。しかし『獄中花』の影響も依然一定に維持されている。『一説春香傳』では李道令と春香が愛を交わす期間が一年と決められているが[20]，期間が明記されている点で『古本春香傳』（『南原古事』も同一）の‘二～三年’と類似する。『獄中花』や『男唱春香歌』，‘84 張本’には時間の流れが感じられるだけで具体的な期間は明記されていない。李府使が内職で勝品して行く設定は，大部分の異本が同一であるが，『一説春香傳』の‘吏曹参判’は『古本春香傳』と同一である。官職名は‘南原古事系’の中でも少しずつ違うが，例えば『南原古事』は‘工曹参議’で，‘京板 35 張本’は‘戸曹参判’である。『獄中花』と‘84 張本’には‘同副承旨’になっていて，『男唱春香歌』はただ‘内職承召’になっているが，各々異なる感じである。李道令の上京を伝え聞いた春香が器物を散乱させる部分は『獄中花』と‘84 張本’の影響が認められる。

＜離別＞の部分でも春園自身の独特な話素を添加したが，それは李道令と春香がお互いに髪を結い上げてやる場面である。契りを結ぶ男子が女子の髪を結い上げてやるのは，封建的な意味では常識的なことであるが，女子も男子の髪を結い上げてやるようにした設定は，お互いに確約させることを持って男女間に安定的な環境を追求した春園の想像力が加味された結果であると言える。

20）“李道令が春香に会って，互いに愛し合うようになってもう一年が過ぎた。”，『李光洙全集』3，257 頁。

真ん中に位置している＜相思＞は『一説春香傳』の独特さが目立つ部分だと言える。李道令と離別した春香が失意の日々を送ると言う設定は，各々少しずつ違う内容ではあるがほとんどの異本に共通的に入っている話素である。しかし李道令を思いながら過ごす春香に李道令の手紙が届くことや，失意の時間を過ごす春香を見下げる世間の行為は他の異本では見られない。この二つの話素は前代の異本群の影響を確認し難しい反面，後代本である『圖像獄中花』[21]のような異本で確認されることによって，春園の作品が後代本に与えた影響を考えさせてくれる部分である[22]。『圖像獄中花』には李道令の手紙をもらう場面や李道令の手紙を見て月梅が不平を言う場面，そして失意している春香に対する世間の行為が類似して描かれているが，李道令の手紙に対する春香の返事がないのが違う点と言えば違う点である。

後半部の初めの段落だといえる＜守節＞部分は，葛藤という叙事の核心要素と関連して非常に重要な部分である。卞府使が赴任して春香に御伽を強要し，その分付を拒絶する春香に苛酷な刑罰を加えることで作品を緊張の中へ追い立てる役割をしているためである。核心的な役割を遂行する部分であるので，重要な流れはすべての異本がほとんど同一な姿を見せている。従ってこの部分では代表話素の類似性よりは具体的な話素を調べるのがもっと効果的である。

まず，李府使が内職に勝品され上京した後，後任府使が赴任していた期間が目につく。『一説春香傳』は李府使の後任で金府使が赴任して一年間在任し，移配して行った後卞府使が赴任することになっている。このような内容は『獄中花』で確認できる。中間の府使が存在するといる設定が非常に近似する。他の異本では李府使の後任で卞府使が直接赴任することになっているから，この部分での『獄中花』の影響は直接的だと言える。この外にも刑杖を受け下獄されている獄中で見る春香の‘黄陵墓訪問の夢’話素，そして獄中で春香

21）『圖像獄中花』は1932年世昌書館で発行した‘獄中花系’の‘春香傳’異本である。原題は『萬古烈如圖像獄中花』であり，裏表紙には‘女中花’となっている。また‘李國唱唱本，無然居士校録’になっている。各場面ごとにその内容に該当する絵が添えられていて，絵の側には簡単にどんな場面であるかについての説明が添付されている。各人物の名前を対話ごとに入れてやり，段落も読みやすく短く切って提示している。表記法は國漢文混用体であるが，漢文の部分のすぐ側に小さい字でハングル表記をして読む便宜を提供してくれている。최혜진,「圖像獄中花研究」,『パンソリ研究』7，1996．12。

22）また，他の可能性が幾らもあり得る。ただこの話素が本稿で検討の対象にする代表異本に見えないと言う点で，特に『圖像獄中花』の母本であると言える『獄中花』に見えないという点で可能性を想定して見ることができるであろう。

が手紙を書いて発送する内容も『獄中花』の磁場の中にあると見える。

その他に卞府使が新延の挨拶に来た房子と春香に対して問答を取り交わす様子や春香の牢獄の前でならず者達が色々な行為をするのは‘南原古事系’の感じが強く，赴任して春香に対して問答する部分では‘84張本’の影響が感じられる。春香の牢獄前で行われる人々の行為は，多くの異本にあまねく入っているが，‘84張本’では妓生達が主体であり，『獄中花』では町の人々になっている。従って＜守節＞の部分は『獄中花』の強い磁場の中で‘南原古事系’の内容が考慮され，‘84張本’の内容が若干添加される位で成し遂げられた部分だと見れるであろう。

これまでの部分では，『獄中花』の影響がより強く作用されていたとすれば，＜御史＞部分からは磁場が移動する感じが濃い。この段落は李道令が科挙に及第し，御史になって戻ってきて獄中の春香と再会する場面が重要な内容であるが，流れにおいては主要異本間に大差はない。しかしこの部分は多くの異本から持ってきた興味を主とする話素が多様に挿入されていて，さらに春園の創作話素まで添入され，‘話素雑貨商’のような感じを与えている。

科挙の試題は異本群を分ける基準とまで認定されている話素であるが[23]，『一説春香傳』は‘春堂春色古今同’となっていて『古本春香傳』や‘84張本’と同一である。しかし李道令が‘謁聖試’に壮元及第した後全羅御史に特差されるという内容と合わせて考えてみれば，『古本春香傳』を参照したと見てもかまわない。‘84張本’でも及第した後全羅御史になるが，‘謁聖試’ではなく‘太平科’となっているからである。『古本春香傳』と同じ系列である『南原古事』では全羅御史に特差されるが，‘謁聖試’ではなく‘慶科’にてなっていて，‘京版35張本’では科挙名が‘謁聖試’で同じだが，‘全羅御史’ではなく‘湖南御史’になっているという点で若干の差が見られる。

『古本春香傳』の影響はこれだけではなく，この段落の大部分で類似する。＜御史＞部分の話素はほとんど『古本春香傳』から持って来たと見ても良い位である。『一説春香傳』にはあるが『古本春香傳』には抜けている内容は春香の家を訪ねた李御史が，月梅の祈願の声を聞く場面と萬福寺での月梅と老僧の佛供の場面―この場面は『獄中花』の話素である―，そしてこの段落の最後の部分である話素段落（30）の客舎の乞食達の姿を描写した部分位である。‘破鏡夢’を見た春香が，金パンス（盲目の易者）に解夢を頼む部分での卜銭の量も違うが，パンスの姓が同じだから，この部分も『古本春香傳』の直接的な影響

23） 薛盛景，『春香傳の系統研究』，延世大学校博士学位論文，1980，53～55頁参照。

を排除できない。卜銭の量は‘銅銭四文’で‘京板35張本’と同じであるが，‘京板35張本’が『古本春香傳』と親縁性が認定されている異本であるから‘京板35張本’の影響もある程度は認定しなければならないだろう。ともかくこの段落には，他の異本や春園自身が作った話素が少しずつ混ぜ合わせられながら，『古本春香傳』の話素が順序までほとんどそのままで『一説春香傳』に配置されているから，『古本春香傳』を母本にしたと規定しても良いであろう。

『一説春香傳』の最後の段落である＜出頭＞でも‘南原古事系’の影響が顕著である。特に『古本春香傳』を母本にしたと見ても良い位である。大部分の話素とその配置が類似しているためである。

この部分の代表話素は‘金樽美酒詩’と‘卞府使の処理’だと言える。本官が‘詩作り’を提案し，卞府使を懲治しない『獄中花』を除けば，大部分の代表異本が似ている。『獄中花』を除けば，雲峯営将が詩作りを提案して御史が自ら願い出て詩を作り，御史の出頭の後は卞府使を懲治している。『一説春香傳』に見られ‘封庫罷職’という用語は，‘84張本’の影響が感じられる。‘南原古事系’は‘封庫罷出’になっており，『男唱春香傳』ではただ‘封庫’になっているためである。

この外，卞府使の誕生日の宴会に裏門から入場する話素は‘南原古事系’だけに存在し，御史が任務を終えて上京した後の後日談話素はほとんど『古本春香傳』と同じである。‘京板35張本’も大部分の内容がほとんど類似した様子を見せてくれるが，御史が公事を処理して春香と月梅を上京させる部分で少し違いがあるので，『古本春香傳』の母本可能性を制約するには手に余ると思われる。『一説春香傳』のように春香と月梅だけを上京させる異本は，『獄中花』と『古本春香傳』位であり，他の異本では香丹（上丹）まで上京させることになっている。ところが，『獄中花』は卞府使の処理過程が著しく違い，話素段落（43）の後日談がないので，やはり『古本春香傳』を母本と見ても無理ではないだろう。

以上で調べた結果を総合すれば，『一説春香傳』は三つの土台の上に創作された異本だと結論づけられる。全体的には前半部である＜縁分(縁)＞，＜サラン(愛)＞，＜離別＞，そして後半部だといえる＜守節＞の部分までは『獄中花』を主要テキストにし，後半部である＜御史＞と＜出頭＞の部分は『古本春香傳』を基本テキストにしたと言える。それに伴い，中間の＜相思＞段落といくらかの部分――（10）の春香の部屋での‘本読み’，(12)の‘髪結い’，(30）の客舎の乞食達の姿，（44）の創作談等――に春園の想像力が動員された独特な話素が添加され，その他の異本が参照される中に，春園の近代的な技法が加わって作られたテキストだと規定できるであろう。

3. 形象化技法上の特性

1）近代的技法の冒頭

『一説春香傳』で近代的な何かを見つけるのは余り難しいことではない。読書過程でもその感じが古典小説を読むのとは大いに異なる。前で言及した発話で始まる冒頭も，口語体の発話，さらに口語体の発話が現代的感覚の中で成し遂げられている点等は，この作品を古典小説であると言えなくなるようにする一次的な地点となるであろう。

近代と言う用語を使っているが，実は1925年当時の時代の流れと言う用語がもっと適切であろう。その当時の朝鮮は外部から近代的な多くのものを受け入れ，体化させていたが，まだ近代の姿が完全に体化されていたと見るにはかなりいい加減な社会であったからである。ところが，時代の先頭に立って，近代的意識を実践していた春園であったから，春園の特性として近代的な性格を指摘するのはそれほど無理なことではないであろう。要するに近代的技法と言うのは時代的流れの制約の中にいた春園の特性だと理解できるだろう。

技法と関連し，近代的な何かを感じさせる最も重要な地点は冒頭の様子である。冒頭は作品の全体的な感じを左右すると言う点で非常に大切だが，特に韓国古典小説の冒頭は作品の核心人物の情報が要約的に提示され，その情報が作品を貫通して読者に特定な流れを認識するように作られるのが一般的である。しかし，『一説春香傳』ではこのような古典小説の技法が全く考慮されていない。

> 『여바라 방자야!』하고 책상 위에 펴 놓은 책도 보는 듯 마는 듯 우두커니 무엇을 생각하고 앉았던 몽룡(夢龍)은 소리를 치었다.『여이』하고 익살덩어리로 생긴 방자가 어깨짓을 하고 뛰어 들어와 책방 층계 앞에 읍하고 선다.（205頁）

『一説春香傳』に見える冒頭の様子である。一般的な古小説の冒頭を省略し，正に人物の発話で始めている。冒頭を発話で始めることにより，読者は初めから人物と密着する感じをもつ。叙述者の媒介なく読者が直接人物を感じられることとなるのである。古典小説の文法としては，何かが抜けてしまったような感じを拭えないが，近代開化期小説から始まった近代的技法の確認だと言える[24)]。

ところで，その発話が主人公の単独発話ではないというのがまた問題的である。作品の冒頭から主要人物である李道令と，周辺人物である房子が一対一の比重で形象化されているのである。発話が人物の特性を間接的に提示してくれる，技法としての近代的な性格だけではなく，対話の相手になる人物にまで関心を傾けさせる役割を遂行すると言う場合，『一説春香傳』の冒頭は感じだけでおわる次元の問題ではない。

李道令と房子の対話が‘春香傳’の必須要素の中の一つであり，『南原古事』のように房子の発話が相当に付言されている内容が見られる異本があるので，房子の発話その自体が問題的である訳はない。しかし冒頭から周辺人物を配置しながら，その比重を主要人物と似たように構成したら，その裏面に置かれている作家の意図は，少なからぬ意味を持っていると見なければならないであろう。春香という代表的な人物を立たせて階級を超越する何かを遂行するようにした，以前の‘春香傳’は，20 世紀の春園の読者には自分達と類似する階級である周辺人物の行動そのものを，より強化させる方向で，一歩進展された構成を成し遂げるようにしたのである。後で調べるが，‘月梅’の役割もやはり相当に強化されているが，これも近代意識の投影であるという脈絡で理解できる。

しかしこのような技法が近代的な感じを与えてはいるが，‘春香傳’の冒頭がそのなりに全体の構成の中で意味を持つと言う時，『一説春香傳』の構成が全体的に成功的だといえるかは疑問である。春香傳の代表異本が冒頭で主人公個人の特別な誕生に注目することで，大詰めのハッピーエンドを背景的に後押ししている点が認められると言うなら，既存の‘春香傳’と類似した大詰めを構成している『一説春香傳』の冒頭が, 大詰めのハッピーエンドとどんな意味関係に置かれるかは曖昧だ。さらに春香で始まる異本群と李道令で始まる異本群が春香の身分にまで決定的な影響を及ぼしている点を考えれば，ただ対話で始まるからと言って近代的な成就をどの位成し遂げたかは，再度考える余地を残すと言える。

例えば，春香で始まる‘84 張本’や‘獄中花系’は冒頭に配置された春香の誕生の話素がすでに春香の身分の非常さを見せており，作品の展開上でも胎夢が天上と連関され詳しく設定されることで春香の身分を上昇させる役割をしている。それと関連して，冒頭の内容は広寒楼で李道令が春香を招待した時，李道令の招待に応じず自分の家へ帰ってしまう設定に強力な説得力を提供する。これに比べ，李道令から始まる‘南原古事系’では春

24） 前で，‘20 世紀初めを歴史的絶地点であるとまで評価されるほど古典と近代の偏差が激しく揺動していた時期であった’と言ったが，発話で始まる小説の冒頭もこのような評価を後押しする証拠となる。以前にはまったく見られなかったことが，外部の影響により，突然現われた感じを与えているのである。1908 年の作品『雪中梅』ようなのが代表的だと言えるだろう。

香が実際に妓姓の身分であるが春香の前生の身分と関連した胎夢が存在しないし，ゆえに当然広寒楼で李道令の招待に応じて春香が広寒楼に来ざるをえない設定がまたそれなりに説得力をもつようになる。

このような構成上の問題点にもかかわらず，『一説春香傳』の冒頭の様子が，技法上の側面に限定する本稿の立場でみれば，近代的な時代の流れの中で春園によって成し遂げられた新たな試みの結果であることは認定できるであろう。

2）月梅の役割強化と名前の命名

『一説春香傳』で確認できるほかの特徴の一つは，月梅と関連した部分である。‘春香傳’の多くの異本で，月梅の役割は余り目立たないと見るのが一般的である。後期のテキストになりながら月梅の役割が強化される様子が見られるはするが，『獄中花』の御史出頭以後の独特な月梅の役割を除けば基本的に月梅は上丹（香丹）や房子のような周辺人物の範疇を逃れられない。しかし『一説春香傳』での月梅は，春香や李道令の役割に準する比重を占める。

『말씀하지요－못할 연유를 말씀하지요. 이 애가 비록 월매의 딸로 태어났으나 근본은 양반이요 회동 성참판 영감이 보의로 남원에 좌정하여 나를 수청을 들이시었다가 몇 달만에 이조 참판으로 승차하여 내직으로 들어가실 적에 날더러 가자고 하시는 것을 노모가 계신고로 못 가고, 이별한 그달부터 잉태하여 이 애를 낳았는데 그 연유로 영감께 고목하였더니, 젖줄 떼는 대로 이 애를 데려가마 하시더니 운수 불길하여 영감께서 그해 겨울에 별세하시니 하릴없이 이 애를 내가 기를 제 금이야 옥이야 중문 밖에도 안 내놓고 꼭 글공부만 시켰지요. 이 애도 근본이 양반의 씨라 재주로나 행실로나 어느 대갓댁 아가씨한테 밀리지 아니하지요. 이렇게 힘써 애써 고이고이 기른 딸을 양반 집에 주자하니 내 지체가 부족하고 상사람을 주자 하니 내 딸이 아깝구려. 그렇다고 남의 첩으로나 주기는 죽어도 싫고, 이리하여 상하사 불급으로 혼기만 늦어가니 낸들 아니 걱정이요? 도련님은 명문의 귀공자로 춘절 나비 꽃 본 듯이 일시는 이 애를 사랑하시나 사또께서 내직으로 승차하시와 올라가시는 날이면 도련님도 따라가실 것이니 그때에 이 애를 생각이나 하시겠소? 그리되면 옥같은 내 딸은 생과부가 되어 송죽 같은 그 절개로 개가할 리 바이

없고일생에 독수공방 눈물로만 지낼 터이니 그 아니 딱하고 못할 일이요? 그러니 도련님은 그런 말씀 아예 마시고 약주나 잡수시고 놀다가는 가시오.』(204 頁)

少し極端的な引用ではあるが，上の部分は月梅の性格がどの位強化されているかを良く表している部分である。実状月梅の長い発話は，ただ長さの問題ではなく，その中に重要なことが含まれているゆえ意味を持つ。作品の展開と関連した詳しい情報を，読者に提供してくれる役割を遂行している為である。さらに月梅は発話が長く現われている上にとても頻繁にその姿を見せている。既存の‘春香傳テキスト’で，月梅だけのための場面が存在していないから，既存の流れから大きく外れていない『一説春香傳』でも，別に月梅の独立的な場面を作っていないが，既存のテキストならば暫時登場する場面でも多様な発話をしている。それもただ周辺人物ではなく，媒介者としての役割を非常に忠実に遂行する姿で描かれている。月梅は単に春香を生んだ人物ではなく，春香の母親としての役割を実際的に遂行する人物であるのだ。

例えば，房子が李道令の手紙を持って広寒楼から春香の家を訪ねて来た部分を見よう。この部分は‘84 張本’の影響が認められるが，形象化の様相は大きく変わっている。‘84 張本’では，春香の家を訪ねて来た房子と春香が暫時言い合いをした後，春香の心が李道令に傾きながら，春香が月梅の顔色をうかがう。この時月梅は‘龍の夢’を話しながら春香と李道令の出会いは偶然なことではなく，予定されていることだと言う暗示的情報を提示し，出会いの必然性を読者に提供している。しかし，出会いを認定する主な理由は“양반이 부르시난듸 안이 갈 슈 잇건난야 잠간 가셔 단여오라”[25]となっている。母親としての役割を全く遂行していないのではないが，『一説春香傳』で見られるように，条目ごとに母親として提起しなければならないことを漏れなく提起する 20 世紀の月梅とは比較できない。

月梅のこのような役割の強化は，その以後にも同一に現われる。戯れ合う部分や李道令が御史になって訪ねて来る部分，御史出頭以後の部分などのように，既存のテキストで月梅が少しでも役割を遂行していた部分では例外なく，媒介者の役割を忠実に遂行しながら作品の展開上で緊要な情報を提供したり，無理なく場面が流れるようにしてやる助演の役割を尽くしている。

25)『春香傳全集』4，308 頁。

月梅と関連して『一説春香傳』の近代的意識を確認できるようにしてくれるもう一つの徴表は，‘月梅’と言う呼称に関する部分である。既存の‘春香傳テキスト’に見られる月梅の呼称はほとんど同一である[26]。個人の名前で呼ばれることではなく，春香という存在を通じて間接的に存在する‘春香の母’や‘春香어미’あるいは‘春香어모’等と呼ばれる。小説の中で，名前が個人の存在を象徴的に示してくれる装置と言う時，自分の存在を直接的に示してくれる名前を持っていない存在が，個人としての役割を忠実に遂行できないのは自明である。

このような呼称は，父親や夫，或いは子供の存在に載せられ間接的な生を生きている女性達の立場を端的に見せてくれる。家の中での一定な領域確保が女性としての本質的な何かだと認識しながら，運命的に生きて行った近代以前の女性の生では，名前が余り重要な事ではなかったかも知れない。しかし近代意識が社会の支配的なイデオロギーに作動しながら，そのような認識は容赦なく壊れてしまう。女性も社会の一構成員としての役割を十分に遂行できると言う事実が少しずつ確認されながら，わが社会にも女性はただ女性としてではなく一人の個人としての位置を与えられるようになる。『一説春香傳』では，‘春香の母’や‘春香어미’或いは‘春香어모’ではなく，‘月梅’と言う名前で呼ばれながら，春香の母親ではない個人としての正体性を確保するようになる。春園が『一説春香傳』を書いた 1925 年は，外部の影響ではあるが，多様な社会の部分で近代化が進行していて，女性に対する認識も相当に変わった時代であった。さらに春園は時代の先頭に立って近代化を体験して来た人物の中の一人であった。

無論‘月梅’と言う呼称も，個人としての価値を完全に含蓄している呼称ではないのは明らかである。妓生の生と切り離せない制約された意味での名前であるからだ。それにもかかわらず‘春香の母’や‘春香어미’のように媒介者を通じて間接的に成り立つ呼称とは質的に別の次元にある。妓生という身分と連結されるとしても，一存在者をそのまま表してくれる呼称であるからだ。さらに月梅は現役ではなく退妓である。従って，‘月梅’という呼称は，妓生としての存在を指称するのではなく，一個人としての人間月梅を指すことになる。ゆえに‘月梅’は個人の存在を直接的に想起させる役割を遂行するのである。

26） 名前を呼ばない点でそうである。20 世紀のテキストである『獄中花』でさえ月梅の呼称は‘春香の母’である。月梅を紹介している部分での‘月梅’という呼称と，御史出頭の後に月梅の行動を描写する部分で‘月梅氏’という呼称が見られるが，それ以外の部分ではほとんど‘春香の母’で統一されている。その他の異本では‘春香の母’，‘春香어미’，‘春香어모’等の名称が混用されている。

作品全般を通じて‘月梅’と言う呼称を一貫して使用している春園の意識は，以前作品の享受者とは全く別に作動していたと見ても差支えないだろう。それが母親という身分だと言う時，春園の女性に対する近代的作動機制が発動するのは当然なことだったかも知れない。彼には一人の人間としてだけではなく，自分を力強く支えてくれながら，人生の同伴者として一緒に生きて来た許英淑という女性に対する強い認識が作動していた。当時の春園に母親という役割が，単純に夫や子供を通じて認識される間接的な存在である事は出来なかったであろう。

時代人としての春園の特徴が表れている部分は，『一説春香傳』に見える時調を通じても確認できる。時調は言うまでもなく韓国古典詩歌の代表的ジャンルであったが，漢詩の清算の雰囲気と噛み合って全幅の支持を受けるジャンルとしての有利な立地を工面していた[27]。春園は時調に大きな関心を持っていた。1920年代に入って始まった‘時調復興運動’の先頭に六堂と春園がいたのは良く知られている事実である。‘時調復興運動’は，その時代的な背景が韓国文学史の展開と関連づけられるが，1920年代に入り，所謂‘KAPF’の文学がこの地に形成されながら，‘KAPF’が植民地現実に社会主義の観点，つまり力の文学で対応しようとしたことに比べて，‘国民文学派’では我々のものを立てて民族意識を鼓吹することで，植民地現実に対する文学的対応を工面しようとしたのである。KAPF系列で主張した‘内容優位論’の代案として立たせた形式論であったのである[28]。

春園はこれより何年か先立ち1922年にすでに，時調31首から成る＜楽府（高句麗之部）＞を『白鳥』の創刊号と2号に発表したが，それは‘詠史楽府’の体裁を整え，人物中心とした膨大で統一性を備えた，そして最も韓国的な‘詠史楽府’を作ろうと試した結果物であった[29]。このような時調の関心が，『一説春香傳』の中に象徴的に姿を表したと言える。広寒楼の招待を拒絶して家に帰った春香に送った手紙の句節も時調であり[30]，李道令の手紙を見た春香がすぐ自分の返事を書いて房子に預けたのもまた時調である[31]。これだけではなく，李道令と春香が春香の部屋で戯れ合う場面（250頁）や，杖刑を受け

27） 趙東一,「時調復興運動の背景と性向」,『韓国文学通史』5, 知識産業社, 1988。269 − 273頁参照。

28） 金大幸，『時調類型論』，梨花女大出版部，1988，333頁。

29） 任基中,「詠史楽府と李光洙」,『古典詩歌の実証的研究』，東国大出版部，1992。

30） 어지어 내 일이어 인연도 기이할사 / 언뜻 뵈온 님이 그 님일시 분명하이 / 광한루 예 보던 벗이 찾아온다 일너라.『李光洙全集』3，220頁。

31） 이몸의 정렬함이 삼생에 뻗었으니 / 천상 천하에 날 안달 님 없으련만 / 그처로 찾으시는 님을 막을 줄이 있으랴.『李光洙全集』3，222頁。

て牢獄に入れられていた春香が独白調で自身の悲しみを歌う部分（305 頁，309 頁）も時調になっている。時調を立たせて人物の感情を伝達する機能を付与することで時調の新たな可能性を模索しようとした点が認められる。従来の漢詩が遂行していた小説の中での媒介体の役割を，伝統的な時調に付与しようとする春園の試みが，先駆的な感じを与えている。

4. 結論

‘春香傳’は 120 餘篇を上回る大作品群であり, その中の多くのテキストが小説であるが, その他にもパンソリを始め唱劇本，シナリオ，マダンノリの台本，戯曲，詩，ミュージカル台本, オペラ歌詞本, 漫画等多様なジャンルの素材として借用され再創作されて来た。『一説春香傳』は春園が直接言及したとおり，すでに存在していた多くの‘春香傳’を参照し, 自身の新たな技法を加えて再生産した 20 世紀の‘春香傳’である。

春園が直接参照した異本は，上で調べたように『獄中花』と『古本春香傳』である可能性が濃厚である。話素段落に分けて分析した結果，類似性が相当部分認められるからである。無論検討しなかった異本との影響関係を排除できないが，先だって設定した春園の時代と関連させた仮説の妥当性が認められれば，『一説春香傳』の異本的性格は上の二つの異本と密接な関連があると言えるであろう。

すでに存在している作品の話素を借用しながら，春園だけの技法も駆使されているが, 最も目立つ部分が冒頭である。発話で始まる技法が古典小説では全く考慮の対象にならなかった点を考えれば，古典小説の読者には充分に衝撃的な試みだったに違いない。その作品の内的寄与度がそれほど成功的であったかどうかは別個の問題であるが，改作古典小説を含め古典小説が依然として相当な比重で流通されていた当時の状況であれば，全く新たな技法で包装された春園の作品は，そのものだけでも時代の意義を付与されたであろうと思われる。

当然なことだが，時代人春園の意識も『一説春香傳』の所々に布陣されている。周辺人であった月梅の役割強化と，命名が代表的である。‘春香傳’の後期異本には，月梅の役割が強化されているが，『一説春香傳』の月梅の役割と比べれば，その重要度はずっと弱いだろう。春園の月梅は，春香の母親以上の役割を遂行しており，それ故に発話の長さや頻度がめっきり増えている。

月梅を‘月梅’と命名するのも春園が持っていた時代の新たな意識の所産である。女性

は父親，夫，子供の周辺にとどまりながら，自分の正体を自分のものではなく，男性の正体性に重ね付けられた存在で生きて行かなければならなかった封建的意識に対する強力な問題提起でないはずがない。

時調が用いられている様子も，春園の意識が直接的に反映された結果である。六堂と共に国民文学運動の主要人物として活動した春園は，公式的に運動を展開する一年前の作品である『一説春香傳』にも，自身の創作時調を公開した。実際に文学運動としての時調の創作活動では，他の人物に比べ活躍が大きかったとは言えないが，春園としては自分なりの運動を展開していたことを確認できる部分として理解できるであろう。

これからは，『一説春香傳』が後代本にどんな影響を及ぼしたかを究明する作業が成されなければならないと思う。本文の中で確認されたように，独特な話素が後代本に影響を及ぼしていることが認められはするが，より具体的な確認作業を通じて，この作品が持つ文学史的意義を明確にする研究が必要であろう。